潟語り（三十四）

潟船保存会　その二

文・小西一三
絵・小西由紀子

大崎の三浦新七さんは昭和24年生まれ。干拓前の潟の広大な風景を知り、きれいな潟で遊んだ最後の世代かも知れません。潟船保存会の会員でもある三浦さんに、潟の原風景を復活させようと活動を続ける「八郎太郎プロジェクト」について語っていただきました。

昔のヨシ原を復活させよう

干拓前の八郎潟の岸辺は見渡す限りのヨシ原でした。しかし今の八郎湖の湖岸のほとんどはコンクリートで、昔の面影を残しているところはほとんどありません。湖岸にヨシなどのさまざまな植物を呼び戻して「潟の原風景を復活させようというのが『八郎太郎プロジェクト』です。

本格的に活動を始めたのは平成17年度から。まず最初に岸から5メートル沖に丸太を組み合わせて長さ30メートルの消波堤を作りました。これは視察に行った「霞ヶ浦のアサザプロジェクト」を参考にしたもので、この消波堤がないとせっかく植えた植物が波で流されてしまうからです。最初の年はこの消波堤と岸の間に砂を入れて浅瀬を作り、そこにヨシやガマ、マコモ、アサザなどを植えました。しかし、冬の間の波や風は予想以上に強く、砂はあらかた流されてしまい、せっかく植えた植物も無くなっててしまいました。

2年目は1年目の失敗をふまえ、消波堤を15メートル沖に作り、さらに砕石で消波堤の両側をふさぎ、横からの波にも備えました。冬の波対策はなんとかなりましたが、今度は水位の変動に泣かされました。

八郎湖は農業貯水池でもあり、農繁期と農閑期では水位が50センチも変わります。春先は水位が上がるので、やっと生えてきた植物が水中に潜ってしまうし、逆に秋になって水位が下がると、せっかく伸びたマコモが倒れてしまう。このように自然の湖と違った八郎湖ならではの難しさがあります。なんとか根付いたのは3年目に入ってから。やっとの第一歩だけど、嬉しかったですね。

最初の年に手がけた所に立てた看板とその横に立つ三浦新七さん。失敗をのりこえ、今ではしっかりと植物が育っている